
面ライダーW・新たなる事件簿 第一章「Aからの再スタート / 白衣の天使は真っ赤に染まる」

稲妻侯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW・新たなる事件簿 第一章「Aからの再スタート／白衣の天使は真っ赤に染まる」

【Nコード】

N1909U

【作者名】

稲妻侯爵

【あらすじ】

ここは風の吹く街、「風都」。
ある「探偵」と、その相棒である「魔少年」が、街を揺るがす陰謀をくじいてから一年。

自らの存在と引き換えに街を守った「魔少年」が戻ってきた。
再会の喜びを噛み締める暇もなく、新しい事件に巻き込まれていく仲間たち。

果たして、彼らは、この事件を解き明かすことが出来るのか？

「仮面ライダーW」の二次創作です。
物語は、TVシリーズ最終回直後から始まります。
「AKB48」メンバーをモデルとしたゲストキャラが登場します
ので、苦手な方はご注意ください。

はじめに

この作品は、特撮番組、「仮面ライダーW」の二次創作です。また、この作品には、アイドルグループ、「AKB48」の一部メンバーをモデルにしたゲストキャラクターが登場します。ここで、本編を開始する前に、あらかじめお断りしておきたいことがあります。

まず、第一に、ゲストキャラクターは、あくまで、AKBメンバーを「モデル」としたものであって、ご本人たちそのものではありません。

したがって、私独自の設定を加えているところがございます。言わば、「Wの世界」というパラレルワールドにいる、顔が同じ別人、ぐらいの感覚でとらえていただければ幸いです。

さらにもう一点、こういった作品を書いている私ですが、元来、それほどAKBに詳しいという訳ではありません。

また、構成力もあまりないため、自分で考えた流れを書いてゆくだけで精一杯です。

ゆえに、

「メンバーの〇〇さんを出して下さい。」

などと言ったご要望には、お応えしかねます。

あらかじめご了承下さい。

一応、現時点では、少なくとも、今回の「選挙」のトップ10の方々をモデルとしたキャラクターは、全員何らかの形で登場する、とだけ申し上げておきます。

なお、これは、たまたま、出そうと考えた方がみんなトップ10入りした、という偶然の産物です。

また、中には、「ドーパント」化させるキャラクターもおります。

パラレルとはいえ、そういうところを見たくはないと言つ方には、
お勧めできません。
身勝手なことを申し上げるようですが、どうかご容赦下さいませ。

Aからの再スタート/怪物患者(前書き)

この物語はフィクションであり、実在する、いかなる人物、団体、事件とも、一切の関係はありません。

Aからの再スタート/怪物患者

これまでの、「仮面ライダーW」は……。

「人を愛することが、罪だとしても……？」《Utopia!》

「さようなら、相棒……。」

「『EXE』？」

「俺たちは、『ミュージアム』を継ぐ者。」

《Ocean!》

「これ、レアだよなあ……。」

「エクストリーム!？」

「……ただいま、翔太郎。」

「こらあ、俺を無視してんじゃねえぞ!!」

《Energy!》

「行くぜ、相棒……。」《Cyclon!》

《Joker!》

俺の名前は「左翔太郎」。この「風都」を愛するハードボイルドな探偵さ……。

パソコン!

「もう、翔太郎くん、毎回毎回、どこ向いて独り言言ってるのよ!」

「痛えな、『亜樹子』！」

俺は、『視聴者』のみなさんにだな……。」

「はあ、視聴者？」

何言ってるの、そっちは壁しかないじゃん。」

「翔太郎、メタ発言はその辺にしまえ。」

亜樹ちゃんも落ち着くんだ。

今日は、僕の帰還祝いじゃなかったのかい？」

翔太郎の「相棒」こと、「フィリップ」が言うと、

「……そうだよな。」

さっ、料理も用意できたし、食べよ、食べよ！」

この、「鳴海探偵事務所」の所長、「鳴海亜樹子」が手を叩きながら言う。

すると、テーブルへと近づいて行くフィリップが、翔太郎にこう言った。

「翔太郎、1ついいかい？」

今日見てくれているのは、『視聴者』じゃなくて、『読者』だ。」

「そうだ、今日は小説だったな。」

うっかりしてたぜ。」「だーから、視聴者とか読者ってなんなのよ？」

あたし聞いてないし……。」

不可解そうに呟く亜樹子であった……。

3人がしばらく食事をしていると、事務所の扉がノックされ、赤いジャケットの青年が入って来た。

「『竜くん』！」

ここに来たってことは、仕事はもう終わったの？」

彼は「照井竜」。

風都署・「超常犯罪捜査課」の課長であり、若いにもかかわらず、警視というエリートであった。

「いや、ここに来たのは、フィリップの帰還パーティーのためじゃ

ない。

ちよつと、調査を頼みたいことがあつてな……。」

「どうした照井？」

「また事件か？」

「翔太郎の問いかけに、

「ああ。

最近起きている、『連続窒息事件』のことは知っているな？」

と照井が言うと、

「それなら、さっきも翔太郎から話を聞いていたところだ。

こういう類いの事件の場合、被害者に何らかの共通点があることが多い。

さしずめ、僕に共通点を『検索』して欲しい、ということではないかな？」

「フリリップが尋ねるが、

「いや、共通点はもう判明している。

全員が、『風都記念病院』に通院、または入院していた。」

照井が答える。

「でも、こちら辺で一番大きい病院はあそこだから、それだけじゃ、襲われる可能性のある人は、絞りきれないんじゃないの？」亜樹子の質問に、

「実は、もう1つ共通点があつたんだ。

全員、いわゆる、『モンスターペイシエント』だった。」

「モンスターペイシエント、つまり、病院や医師、看護師などに無理な要求をする患者のことだね。

そうそう、この事件について聞いていて、僕も奇妙だと思ったことがあつたんだつた。

確か、被害者全員、窒息はしたものの、死者が1人も出ていないそうだね。」

「フリリップの問いに頷く照井。

「その通りだ。」

被害者の口には、多量の羽毛が詰め込まれていた。

そして、被害者たちは、口を揃えてこう言っている、突然現れた『天使』が羽ばたいたら、羽毛が飛んできた、とな。」

「天使、か……。」

「事件でなかったら、なかなかロマンチックな響きなのに……。」
翔太郎、亜樹子がそれぞれ呟く。

「こんな事件を起こしているんだ、天使なんかであるはずがない。」
拳を握りしめる照井。

「とにかく、左には、風都記念病院の調査を依頼したい。

実は、被害者の中には、窒息死しかけて、救命措置を受けた形跡がある人物がいてな……。」
「なるほど。」

犯人は、医療の知識があり、なおかつ、被害者の『死』に対しては抵抗のある人物、という可能性があるということか。」
フィリップが、納得したように言う。

「そういうことだ。」

「そうと決まれば、さっそく、出発の準備をするか……。」

「待って翔太郎くん、あたしも行く!!」

亜樹子もあわただしく席を立つ。

「それでは、僕は自分なりに調べられることを調べておこう。」
ガレージへと入っていくフィリップ。

照井、翔太郎、亜樹子は、風都記念病院へと向かった……。

病院に到着すると、翔太郎が、

「すみません、こういう者なんです。」

帽子を取り、格好つけながら、受付の女性に名刺を渡した。

すると、名刺を受け取った、「古嶋こじま」と言つ名札を付けた受付の女性せいは、首をかしげながら、

「『帽子を愛する会・風都支部長 左翔太郎』？」

何のご用でしょうか？」

「あつ……。すいません、それ、プライベート用でした!! こっちです……。」

慌てた様子で、もう一枚の名刺を差し出す翔太郎。

「『鳴海探偵事務所・探偵 左翔太郎』……。」

もしかして、『事件』のことですか!?

申し訳ありませんが、お引き取り下さ……。、「風都署の照井と申します。」

彼は、私の協力者です。」

刑事さんがおつしやるなら……。」

しばらくお待ち下さい。」

照井の警察手帳のおかげで、なんとか追いつ返されずに済んだようだ。

待っている間、照井がポツリと呟いた。

「なあ左、最近の看護師は、だいたいズボンを穿いてるんだな……。」

すると翔太郎は、

「おいおい照井、最近は、動きやすさのために、ほとんどああいう格好だぜ。」

……。まさかお前、『ナース服萌え』か?」

「俺に質問するな!!」

慌てふためく照井に、

「へえ、そうなんだ……。」

じゃあ、あたしが竜くんのためにナースコスしてあげようかな?」

亜樹子がからかうように言う。

そうこうしているうちに、落ち着いた感じの女性がやって来た。

「はじめまして、師長の北斗夕子と申します。」

「風都署の照井竜です。」

それでこちらが……、

「探偵の左翔太郎です。」

ではさつそくですが……」「あれえー、翔ちゃん、何やってんの？」突然、後ろの方から、聞き覚えのある声がある。

「『クイーン』、『エリザベス』、何でこんな所にいるのよ!？」そう、翔太郎たちに情報をもたらす、「風都イレギュラーズ」の一員である、クイーンとエリザベスであった。

「実は、あたしたちの中学時代の同級生が、ここで看護師やっててさ、時々会いに来てるんだ。」

少し大人っぽいクイーンが言うと、

「それより聞いたよ、フィリップくん、帰ってきたんでしょ？」

また事務所に行こつかな？」

フィリップのことがちょっと気になるらしい、エリザベスも言う。

「まあそれはさておき、一応紹介しとくね。」

田上敦子。
たがみ

さつきも言った通り、ここの看護師。」

クイーンの紹介に、

「田上です。」

クイーンとエリザベスから、噂は聞いてました。

たしか、『ハーフボイルドの左さん』、ですよね?」

白い制服、セミロングほどの髪を、シュシュで束ねた敦子が口を開く。

「クイーン、エリザベス、いい加減なこと教えてんじゃねえぞー!!」

……あはは、失礼、わたくし、左翔太郎、『ハード』ボイルドな探偵です。

正確に覚えて下さいね。」あくまで、敦子に対しては紳士的な態度の翔太郎。

「……また出た、翔太郎くんの悪い癖。

女の子が相手だと、すぐ紳士ぶるんだから……。」

「亜樹子、何か言ったか!？」

「べ、別に……。」

そんなやり取りを無視して、

「風都署の照井です。」

手帳を見せながら自己紹介する照井。

一通り挨拶も済み、

「では、お話を聞かせていただいても・・・、」「すみません師長、ちよつと来ていただけますか？」

北斗師長に、照井が事情を聞こうとしたところ、シヨートヘアで長身の、白衣を着た若い女性が師長に呼び掛けた。

「すみません、信太^{しのた}先生。」

申し訳ありませんが、仕事のようなので・・・。

田上さん、悪いけど、刑事さんに最大限協力してあげて。」

と言いながら師長は去って行ってしまった。

「では、お役に立てるかどうかわかりませんが・・・。」
敦子は翔太郎たちの方を向く。

「ねえねえ、翔ちゃんがここに来たってことは、もしかして『あの事件』のことを調べてるの？」

でも、あの被害者は、この病院に迷惑かけてた訳だし、襲われて当然なんじゃないの？」

「エリザベス、いくら被害者が病院に迷惑をかけてたって言っても、そういうことを言うもんじゃねえ。」

その人たちだつて、『この街』の一員なんだ。その人たちを苦しめるのは、『街を泣かす』ことだ。」

「でも、そんな奴らがいなくなったら、『敦子のお母さん』だって・・・。」

と言いかけて、ハツと口をつぐむクイーン。

「どうということなのか、説明してもらえないか？」
静かに問いかける照井。

「・・・ごめん敦子、余計なこと言っちゃった。」
申し訳なさそうに言うクイーンに、

「いいの、いつかは分かることだし・・・。」

実は、私の母も、看護師 当時は看護婦と言っていましたか」とし

て働いていました。

父は、私が幼い時に病死したので、母は、女手一つで私を育ててくれたんです。私も、幼い頃から、母のような看護婦になることを夢見ていました。

でも、ある日、母は、交通事故で亡くなりました。

まあ、加害者の方はすぐに警察に出頭してくれましたが……。

警察は、母が安全確認を怠ったことが原因だと結論づけました。

実は、その少し前から、母は、いわゆる、『モンスターペイシェント』への対応で、疲れはてて帰って来ることが多かつたんです。

私は、母の不注意の原因は、モンスターペイシェントにあると考えました。

彼らが、母を当惑させることさえなければ……。

まったく、私ってバカですよ。

へりくつだつてことは分かっているんです。もちろん、今はそんなばかげたことを考えたりはしていませんよ。」

敦子は、軽く自嘲的に笑うと、被害に遭った患者たちについての情報を話し始めた。

しばらく敦子から情報を聞いていると、

「敦子ー。」

リボン型の髪留めを付けた、ヘルパーらしき格好の女性が彼女の元に近づいて来た。

「『みなみ』！」

「……あれ、お取り込み中？」

「だったら、失礼します……。」

「みなみ」と呼ばれた女性は、状況を見て、離れて行くこととするが、田上さんのお知り合いですか？」

照井が呼び止めて尋ねる。すると、

「私、『鷹羽^{たかば}みなみ』と言います。」

近くにある、『かざぐるまの郷』って言う老人ホームで介護福祉士をしています。

田上さんとは、ホームのお年寄りを検査などでここに連れて来る時に、同じ年ということが分かって、仲良くなりました。」「
と自己紹介をした。

翔太郎たちも、それに続いて名乗る。

そうこうしているうちに、

「あっ、もうこんな時間。

すみません、そろそろホームに戻らなきゃ。

敦子、また明日ね。」「

腕時計を見ると、こう言って、みなみは帰ってしまった。
しばらく、また敦子の話を聞いていると、

ガッシャーン!!

「あーっ!!

す、すみません!」

どうやら、1人の看護師が、器具をひっくり返してしまったらしい。
敦子は、その看護師の元へ近づくと、

「『佐橋』、あんた何やってるの!？」

・・・もういい、私が片付けとくから。」「
と言う。

そして翔太郎たちの方を振り向き、

「すみません。

ちょっと待ってて下さい。」「

と言うと、片付けを始めた。

すると、佐橋と呼ばれた看護師が翔太郎たちの方に近づいてくる。

「すみませんでした。

田上先輩とお話中だったのに・・・。

あっ、あの、私、『佐橋莉乃』と言います。

まだ新人なので、先輩方には迷惑かけっぱなしで……
って、すみません！

つい、愚痴みたいになっちゃって……。」

「いいよ、そんなに謝らなくて。」

土下座しそうな勢いで謝ろうとする佐橋に優しい言葉をかける翔太郎。

「そっだ。」

田上さんは、どんな人だと思いますか？

率直に言っ下されば結構です。

申し遅れました、風都署の照井です。」

手帳を見せる照井に、

「そうですね……。」

仕事もテキパキしていらっしやるし、まさに、『エース』って感じですかね。

どんな患者さんでも、分け隔てなく、優しく接してますよ。

私だったら、いわゆる『モンスターペイシエント』を相手にする時は、苛立ちを我慢するだけで精一杯なんですけどね……。」

一瞬、拳を握りしめる佐橋。

しかし、次の瞬間には、

「あっ、今のは誰にも言わないで下さいね。」

そんなこと言ったって分かったら、また怒られちゃうので……。」
あわてて取り繕うと、また話を続ける。

「師長からは、時々厳しく指導されているのを見ますけど、そこら辺も含めて、期待されてる感じがしますね。」

そうそう、師長ってとてもお優しいんですよ。

ご主人が営んでいらっしやるパン屋さんのパンを持って来て下さったりして……、って、話が逸れちゃいましたね。

ごめんなさい。

「・・・あつ、あの、実はお話したいことが・・・。」何か言おうとするが、そこに敦子が戻ってくる。

「すいません、お待たせしてしまって・・・。」

すると、佐橋は急いで去ってしまった。

「何だ・・・？」

その後ろ姿を見て、不思議に思う翔太郎。

ひとしきり、敦子から話を聞き終わると、クイーンがこう尋ねた。

「ところで、敦子、やっぱりまだ『アレ』持ってるの？」

「アレ？」

亜樹子が尋ねると、敦子は、制服の内ポケットから、一冊の手帳を取り出す。

「母が、看護婦としてのノウハウを書いて残してくれて・・・。」

ところどころ情報が古いところもあるけど、それでも役に立つコツも載っているので、手放せなくて。

あの、申し訳ありませんけど、そろそろ仕事に戻らないといけないので・・・。」

と言って、敦子も仕事に戻ってしまった。

それと同時に、クイーンとエリザベスもその場を去り、残された翔太郎、亜樹子、照井は、他の人々への聞き込みに移った。

大方の人物に話を聞き終え、病院を後にする3人。

病院から少し離れたところで、バサバサという羽音が聞こえてくる。彼らの目の前に姿を現したのは、大きな翼を持った、全身が白い怪人であった。

「・・・『天使』!？」

「現れたな、『ドーパント』。」

「ドーパント」、それは、この風都に出回っている、「地球の記憶」と呼ばれるデータを収めた、「ガイアメモリ」と言うものを使い、人間が姿を変えた怪人のことである。

さて、亜樹子、照井がそれぞれ言うと、
『警告する。』

この件から手を引きなさい。』

メモリの使用の影響か、変声機にかけたような声で、怪人が話す。

「そうは行かねえな。」

照井、フィリップ、行くぜ。」

赤色のバツクルのようなものを付けながら翔太郎が言う。

それと同時に、遠く離れた、探偵事務所のガレージで、フィリップの腰にも、同じベルトが浮かび上がる。

すると、フィリップは緑の、翔太郎は黒の、USBメモリのようなものを取り出すと、表面のスイッチを押す。

《Cyclion!》

《Joker!》

それと同時に、照井もまた、バイクのハンドルのようなバツクルを装着し、赤いメモリのスイッチを押す。

《Accel!》

「『変身!』」

「変……、身っ!」

《Cyclion - Joker!》

《Accel!》

音楽とともに、翔太郎の身体が風に包まれ、照井の身体も赤く輝く。そして、その後、そこには、緑と黒のツートーンカラーになった戦

士と、真つ赤な戦士が立っていた。

変身が完了すると同時に、フィリップの身体がゆっくりと倒れる。

まず、二色の戦士、「仮面ライダーW・サイクロンジョーカー」が「天使」を指差し、二重になった声で言い放つ。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「まさか、あなた達があの仮面ライダーだったなんてね……」
口調からすると、「天使」は女かもしれない。

「とにかく、振り切るぜ！」

赤い戦士、「仮面ライダーアクセル」が剣、「エンジンプレード」で天使に斬りかかる。

しかし、天使は飛び上がると、羽根を撒き散らす。

爆発こそしないものの、Wとアクセルの視界は奪われる。

「くそつ……」

「翔太郎、メモリを変えよう。」

Wの右手が、赤いメモリを取り出す。

《Heat!》

すると、左手も、

《Metal!》

銀色のメモリを起動させる。

《Heat-Metal!》

Wの身体が、赤と銀に変わり、背中に棍が出現する。

「W・ヒートメタル」が、背中の「メタルシャフト」の先端に炎を纏わせ、羽根の壁を薙ぎ払うと、羽根は燃え上がり、一気に視界が晴れる。

しかし、その時には、天使の姿は既になかった。

「……逃げられたか。」

アクセルが呟き、変身を解く。

翔太郎も元の姿に戻り、帽子を軽くかぶり直す。

「まあ、あれしきのことで引き下がる俺たちじゃないからな。とにかく戻って、方針の立て直しだな。」
その言葉をきっかけに、三人は、再び事務所への帰路につく。

その途中、突如として、照井が、亜樹子の方を向くと、
「しょ、所長。」

ちよつと、話があるんだが……。」「
そう言う照井の顔は、心なしか赤くなっている。
えっ!？」

……。ま、まさか!!
その瞬間、亜樹子の頭の中に、こんな光景が浮かぶ。
「所長、いや、亜樹子さん。」

……。俺と、俺と結婚してくれないか?」
真っ赤なタキシードを纏った照井の言葉に、純白のドレスを着た亜樹子の目からは、真珠のような涙が一粒落ちる……。

はっ、いけないいけない……。
つい妄想が先行しちゃった。

「な、何、竜くん!？」
平静を装いながら聞き返す亜樹子。

「その……。
もしも、もしもナースコスプレをしてくれるなら、服の色は、ピンクじゃなくて、白にしてくれ!!」

ドベシコーン!!!!

亜樹子の手に握られたスリッパは、うなりをあげながら、照井の頭に振り下ろされ、凄まじい音を立てるのであった……。

Aからの再スタート/怪物患者(後書き)

はい。

まず、あの唐突なギャグでのシメについて。

実は、後編がなかなかハードな展開になる予定なので、全体のバランス的に、今のうちにギャグっておいて、ちょっと明るくしておこう、と思ひまして……。

続いて、ゲストキャラに関して。

だいぶ早い段階から、A編の舞台は病院でいこう、というのは考えていました。

で、ゲストを全員看護師にするのは、あまりにもワンパターン過ぎかな、と思い、受付の「古嶋さん」と、女医の「信太先生」というキャラを作ったのです。

そしたら、「マジすか2」で、サドさんが看護師になっていた、という設定が登場しまして……。

あくまで言うておきたいのは、キャラ設定はマジすかより前に考えていたもので、それとは関係ないということですよ。

ただ、鷹羽みなみさんの職業は影響を受けているところがありますかね……。

あと、師長は、ちょっと「シリーズ」の違う作品のキャラを使いました。

北斗は、もともと「ご主人」の名字です。

パン屋というのも「オリジナル」通りですね。

ちなみに店名は「Ace」だったりします。

書いてる途中で気付いたのですが、あの夫婦も「2人で1人」だったんですよね。

オリジナルでは、途中から、「ご主人」1人になってしまいました。。。。

ここで、1つ残念なお知らせが。。。。

Wの、一章での出番は、あれで終了でございます。翔太郎やフィリップは出ますが。

やっぱり、「A」だけに、照井さんに「振り切って」もらおうかなと。。。。

えっ、「アクセルはVシネにまでなってるのに、何で自重しないのか？」って？

「。。。。俺に、質問をするなっ！」

怒らないでください、照井さん。

無理に頼んだ、私が悪いんですから。。。。

それに、今回の相手の気持ちが一番分かるのは、照井さんなので。どういうことかは、次回をご覧ください。

ちよつと、結末がショッキングな感じになりますが。。。。

それにしても、「花ざかり」、すごいことになっていきますね。

翔太郎に、「矢車のアニキ」、さらに、「カ・ガーミン」ですよ。。。。

前作では、「天道」とか「剣」も出ていましたし。

なんとなく、カプト率が高い感じがするのは気のせいでしょうかね？

まあ、前作ではその他にも、「一蹴」や「チーフ」に、「ミライ」、
「走輔」、「音也」、「753」、さらには、「伊狩鎧」までもい
たとか……。

そうそう、今回、ライダーイケメンは3人みたいな感じで言われて
いるようですが、もう1人、「リイマジムツキ」がいるそうです。
申し訳ありませんが、私個人は「あのときは確か、メガネかけてた
っけ……。」という程度の印象しかないので……。

まさか、私も、翔太郎と「あっちゃん」が実際に共演するとは思っ
てもみませんでした。

私は、前作も見ていましたが、今回も見るつもりでいます。

翔太郎、アニキ、加賀美の揃い踏み、というだけで気になりますし。

ただ、姉妹校の女子生徒役もAKBメンバーから出すのはちょっと
……。

何でもAKBを出せばいいってもんじゃないと思います。

まあ、こんなコンセプトの作品書いた私が言うのもなんなんです
がね……（苦笑）。

とにかく、今回はこの辺で。

今回は、もう少しお待ちいただくかもしれません。

Aからの再スタート/母のために・・・(前書き)

この物語はフィクションであり、実在する、いかなる人物、団体、事件とも、一切の関係はありません。

Aからの再スタート/母のために・・・

W、今回の依頼は・・・。

「モンスターペイシエント？」

「医師や看護師、病院に対して、無理な要求をする患者のことだね。」

「翔ちゃん、何してんの？」

「クイーン、エリザベス!!！」

「田上敦子です。」

よろしくお願いします。」

『警告する。』

この件から手を引きなさい。』

「そうは行かねえな。」

行くぜ、フィリップ。」

《Cyclon - Joker!》

事務所に戻った3人に、

「待っていたよ。」

実は、田上敦子の母親の事故について調べてみたら、興味深いことが分かってね・・・。」
「フィリップが語り出す。」

翌日。

ある場所を訪れる翔太郎と亜樹子。

時を同じくして、

「何ですか、お話って？」照井に呼び出された敦子。

「田上さん、単刀直入に伺います。」

最近起こっている『連続窒息事件』、これを引き起こしている『天使のドーパント』、それは、あなたですね？」

一瞬呆気にとられたような表情を浮かべる敦子。

しかし、

「うふふ……。」

刑事さん、変な冗談はやめてください。ドーパント？

あの、時々出てくるよく分からない怪人のことですか？

違いますよ。

なんなら、全身確かめてもらってもいいですよ。」

「何をですか？」

「何って、『コネクタ』に決まって……。」

照井の問いかけに答えかけて、ハツとなる敦子。

「あなたは、ドーパントに関して、よく分からないと言った。

しかし、コネクタが身体に残ることを、どうしてご存知なんですか？

そんなこと、間近でドーパントに変身するところを見たことか、あ

るいは、自分で変身したことでもない限り分からないと思いますが・

……？」

唇を噛む敦子。

しばらくして、

「その通りよ。」

ドーパントとして、モンスターペイシエントを襲っていたのは私。

口では、『そんな馬鹿げたことはしない』って言えた。

八つ当たりだったことも、十分理解できた。

でも、心は、納得できなかった。

こうせずにはいらなかったのよ!!

・・・まあ、こんなこと、あなたに言っても無駄だろうけど。そんなに若くて、エリートで、何の苦勞もしていないような刑事さんに、家族を奪われた私の気持ちなんか分かるはずないわ!!」

「・・・分かるさ。」

「えっ?」

「俺も、『あるドーナツ』に、両親と妹を一度に殺された。最初、俺も復讐心に駆られ、力を求めた。

そして、憎しみの赴くまま、力を振るった。

でも、それは虚しいことだと気付いた。

あの時俺と一緒に来たあの探偵たち、『仲間』のおかげでな。今ならまだ間に合う。

君が手を汚すこと、君のお母さんだって望んでは・・・。「黙つて!

結局、あなたもきれいごとを言うのね。」

照井の話を断ち切り、懐から、メモリを取り出す敦子。

そのメモリは、Wやアクセルが使うのと同じ、「純正品」で、カバ―は白、端子は、赤みがかった金属でできていた。

《Angel!》

そして、敦子がスイッチを押すと、右腕にコネクタが浮かび上がり、彼女は、そこにメモリを挿す。

その姿は、まさしくあの時現れた天使の姿へと変わる。

「どうせ、一度に3人家族を失った自分に比べたら、私の方がましだから、我慢しろとも言いたいんでしょ!？」

「違う!

そんなつもりは・・・。「黙つて、って言ったでしょ!!」

「・・・仕方ない。」

俺は、力ずくでも君を止めて見せる。

変・・・、身っ！！！」

《Accelerate!》

アクセルへと変身する照井は、Eブレードを手に走り出す。

それを見て、敦子の変身した、「エンジェルドーパント」は、翼を広げ、空に飛び上がる。

しかし、アクセルは、落ち着いて、携帯、「ビートルフォン」を取り出すと、キーをプッシュする。

その時、探偵事務所の真ん中に置いてある乗り物のハッチが閉じると、どこかWのマスクを思わせる姿になり、走り出す。

しばらくすると、そのマシン、「リボルギャリー」がアクセルの元に到着する。

すると、到着したのを見たアクセルは、バイクのハンドルのような形のバックルを外して、投げ上げると、なんと、彼の身体が変形し、バイクの姿に変わる。

そして、「アクセル・バイクフォーム」は、ハッチが開いたりリボルギャリーの内部に入っていく。

すると、リボルギャリーの後部にある、円盤状の部分が回転し、赤いパーツが、Bアクセルの後ろに装着された。

そして、赤いパーツが翼を広げると、Bアクセルも空に舞い上がり、上空で、上半身を元に戻す。

「アクセルタービュラー」は、Eブレードを手に、エンジェルDと空中戦を繰り広げる。

「俺は、きれいごとを言いたいんじゃない。」

憎しみに任せて力を振るった後に残るのは、虚しさと後悔だけなんだ！

俺はただ、君にそれを背負って欲しくない、それだけなんだよ。」
エンジェルDの振るうレイピアを受け止めながら言うアクセル。

「呪われた運命を自らの手で『振り切る』、その勇気をくれる人が、きっと君のそばにもいるはずだ。」

アクセルがさらに続ける言葉に、

「・・・私に、そんな人なんていないわよ。」

寂しそうに呟くエンジェルD。

しかし、

「絶望の中にいる時に、そうやって支えてくれている人の存在には
気付きづらい。」

それでも、仲間が、友が、自分のことを大事に思ってくれている人がいる。

それは、事実なんだ。

たとえ、最初はあまりに近すぎて気付かなかったとしても・・・。」

そう口にする照井の脳内には、翔太郎、フィリップ、そして、「一番大事な人」、亜樹子の姿が浮かんでいた・・・。

そうして、しばらく斬り結ぶ2体だが、剣の扱いには慣れていないのか、徐々に圧されていくエンジェルD。

ついに、地上に落ちてしまった。

アクセルは、ゆっくりと地面に降りると、信号のような形のメモリを取り出す。

「これで、振り切るぜ・・・。」

《Trial!》

そして、それをドライバーに差すと、

《ピッ・ピッ・ピッ・ポーン!》

という音とともに、赤かったアクセルの身体が一瞬だけ黄色く変わると、装甲が弾け飛ぶ。

その後立っているアクセルは、青くて、身軽そうな姿に変わって

いた。

すると、「アクセル」は、先ほどまでとは比べ物にならないほどの速さで走り出す。

この姿、「アクセルトライアル」になることで、防御力とパワーが下がる代わりに、高速での移動が可能になるのだ。

Tアクセルは、「トライアルメモリ」をベルトから外すと、上に付いた、ストップウォッチのようなスイッチを押して、それを投げ上げる。

その瞬間、Tメモリが空中で静止する。

それどころか、周辺の空間全体が、Tアクセルを残して全て動きを止めていた。

いや、世界が止まったのではない。

Tアクセルの動きが速すぎるのだ。

Tメモリを「マキシマムドライブ」することで、Tアクセルは、更なる高速移動をすることが可能なのである。

但し、それは10秒が限界である。

Tアクセルは、エンジェルDに向けて、凄まじい勢いのキックを放つ。

横、縦、横、縦……。

ものすごい勢いでキックを放つTアクセルの脚のあまりの速さは、その軌跡が、アルファベットの「T」に見えるほどであった。

そして、彼は、空中に浮いたままのTメモリを掴み、再びスイッチを押す。

「9、6秒……。」

その瞬間、エンジェルDの身体が爆発を起こし、メモリが排出される。

元の姿に戻った敦子は、

「どうしたのよ。」

私はドーパントよ。

犯罪者なんだから、私なんか早く殺せばいいじゃない……」「絶望をつー!!」

敦子の言葉は、Tアクセルに遮られる。

「……絶望をゴールにするかどうかは、君次第だ……。」

そして、静かに変身を解く照井。

その時、3人の足音が駆けてくる。

翔太郎と亜樹子に伴われてやって来たのは、

「敦子、もうやめて。」

「み、みなみ!？」

そう、敦子の友人である、鷹羽みなみだったのだ。

「どうということなの!？」

みなみには、何の関係もないじゃない!!

どうして、わざわざ巻き込むようなことを……。」

翔太郎たちに食って掛かるうとする敦子に、

「待って!!」

「……全部、私が悪いの。」

みなみは、そう言いながら、いきなり頭を下げる。

「敦子、……あなたのお母さんが亡くなったのは、私の……、

私のせいなの!」

突然の告白に、言葉を失う敦子。

みなみは、ゆっくりと話し始めた……。

「あの日、私は、朝から少し熱っぽかった。それでも、その日までずっと小学校に皆勤を続けてた私は、ちょっと無理をして学校に行ったの。その日一日はなんとか過ごせた私は、ふらつきながら下校していた。そうして下校していた私は、

ブッブー!!

と言うクラクションで、ふと我に返ったの。そしたら、私は、もうろうとした意識で、赤信号にも気づかないまま、車道に飛び出していた。すぐそこに車が迫っていて、私は死を覚悟した。その時、私は、誰かに歩道の方に突き飛ばされた。

ドーン!!

私気がついた時には、車道の真ん中に女性が倒れてたわ。その女性は、顔を上げると、
『あなた、怪我はなかった？』
って私に聞いたの。
自分が、額から血を流しているのに。
私が、かろうじて額くと、その人は、
『・・・よかった。』
と言って、・・・笑ったわ。

ニッコリと。

その瞬間、私は、何が何だか分からなくなって、その場から逃げ出した。

次の日、その人が亡くなったってという新聞記事を見て、私のせいだと思っただわ。

私が、ちゃんと警察か救急車を呼んでたら、って……。でも、私が原因だって名乗り出ることは出来なかった。怖かったの。

名乗り出る勇氣なんて出なかった。

それでも、私は心に決めた。

あの人のように、人の助けになる仕事をしようって。

そうして、私は、ついに介護福祉士になった。

そして、お年寄りを検査に連れて行った時に、敦子の顔を見て驚いたわ。

だって、あの時、私を助けてくれたあの人に、そっくりだったんだもの……。」

みなみの告白を聞き終えたところで、照井のビートルフォンに着信が入る。

「もしもし。

……そうですか。

わざわざすみませんでした、『刃野刑事』。」
そして、通話を切ると、

「今、うちの刑事に、あの事故の加害者の話を聞いてもらった。

そしたら、あの現場に少女、鷹羽みなみさんは確かにいた、と証言してくれた。」

すると、照井の話を聞いた敦子は、
「嘘でしょ？」

毎年、母の墓に花を供えに来てくれるけど、そんな話、今まで一度も……。」

「あなたのお母さんに頼まれたそうだ。

『これ以上、あの子を事故に巻き込むのはあまりにも酷すぎるから、

あの子がいたことは、自分たちだけの胸にしまっておきたい。もしも、あの子が真実を告白した時は、警察には、黙っておくように私に頼まれたと言って下さい』、とな……。」

呆然と立ち尽くす敦子。

その目からは、一筋の涙が流れ落ちた。

「……なんでだろう。」

母さんが死んだ原因が、みなみだって分かったのに、みなみのこと、嫌いになれないじゃん……。」

そのとき、彼女の心の中で、何かがパズルのピースのようにはまった。

そうか。

母さんが亡くなった原因がみなみだったとしても、みなみを憎むことが出来ないのは、自分が彼女を「友達」だと思っているからなんだ。

確かに、私には、父さんも母さんももういない。

でも、みなみがいるじゃないか。

いや、みなみだけではない。

「麻里子先生」や、「古嶋さん」、「佐橋」などの同僚もいる。

そして、「師長」も……。

しばらくの沈黙の後、翔太郎が言葉を発する。

「敦子さん、一つ聞いてもいいかな？」

なんで、わざわざ死にそうな被害者に、救命措置をしたんだ？」

すると、敦子は、

「私だって、最初は死んでもかまわないと思ってた。でも、いざ死にそうになっているところを見てたら、身体が勝手に動いてたわ。」

「それこそ、君が『看護師』という仕事に誇りを持っているという、何よりの証拠じゃないのかな？」

君のお母さんが愛したこの仕事を……。」「

「俺たちは北斗師長に話を聞いてきたんだ。君を厳しく指導していたのは、ただ君に期待していたというだけじゃなかったんだよ。」

君と同じように、師長の元で働いていた君のお母さんが出来なかった、君への指導をすること、それが君のお母さんに対してしてあげられることだと考えていたそうだ。」

照井の言葉に引き続いて翔太郎も言う。

その頃には、敦子の目からは、大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ごめんね、みなみ。」

私、自分が孤独だと思ってた。

ずっと、みなみも、病院のみんなもそばにいてくれたのに。

みんなのことが見えてなかった。

みなみ、こんな私だけど、待っていてくれる……。？」「

「当たり前じゃん！」

だって、私たち、親友でしょ？」「

みなみもまた、大粒の涙をこぼしながら大きく頷く。

「それじゃあ、聞かせてもらってもいいかな。あのメモリを、どうやって手に入れたのか？」「

敦子は、頷くと口を開く。

「それは……。」「

しかし、敦子の言葉はそこで途切れた。

ドスッ。

そんな音とともに、彼女の胸には、矢が突き刺さっていた。

敦子の身体は、ゆっくりと後ろに倒れていく。

さながら、スローモーションのように……。

翔太郎たちが、矢の飛んできた方を見ると、見たことのない「銀色の怪人」が、構えていた弓を下ろし、先ほど敦子から排出されたエンジンジェルのメモリを拾い上げ、去っていくところであった。

そんな中、みなみだけは、敦子のそばに駆け寄り、その肩を抱き上げる。

「ねえ敦子、しっかりしてよ、敦子！

お願いだから、目を開けて、敦子おー！！！」

叫ぶみなみの声だけが響き渡る……。

田上敦子は、急いで自らの勤める風都記念病院に搬送され、手術を受け、なんとか一命をとりとめたものの、意識は戻らないままであった。

こうして、この事件が、なんとも後味の悪い形で幕を下ろしてから数日。

うだるような暑い夏の昼下がりに。

突如、探偵事務所の扉が勢い良く開く。

「どうしたクイーン、今日は1人か？」

翔太郎の問いかけに、いきなり顔を覆うと、涙を流すクイーン。

「ごめんね、翔ちゃん……。」

依頼があるんだ。」

これこそ、「第2の事件」の幕が開いた瞬間であった……。

Aからの再スタート/母のために・・・(後書き)

最初に、改めて言っておきます。

田上敦子さんは、生きています。

もう少ししてから、再登場してもらおう予定もあります。

ですから、「あっちゃん」「ファンの皆さん」ご安心ください。

実在の人物をモデルにしているので、こっぴつ描写は、はっきり言
つて際どいところかとも思ったんですが、展開上必要だったもので
・・・。

どうかお許しください。

そもそも、私は、作ったキャラを殺すのがあまり好きではありません。
ん。

(倒す前提で作る、怪人なら別ですが。)

できる限り、出したからには、「生きて」「活躍させたい」と思って
作っているんです。

というより、多くの登場人物が死ぬようなストーリーが好きではな
い、と言っべきでしょうか・・・。

さて、今回登場した、「銀色の怪人」、ラスボスではなく、その人
物の協力者です。

これも、中身は「とあるメンバー」をモデルとした人物です。

ただ、その変身前の人物はまだ先まで登場しませんが・・・。

続いて、キーワード欄に書いた、「会話主体・バトル少なめ」とい
う話について。

そもそも、私は、視覚的に盛り上がる、アクションのような派手な
要素の入った展開を考えるのが苦手です。

そして、どちらかと言えば、内面を描く、みたいな書き方が性に合っているみたいです。

こうした私のスタイルが反映されて、上記の言葉のような感じの文体になりました。で、考えてみると、視覚的要素は、まさしく映像作品に任せておけば大丈夫なんじゃないか、と。

そして、内面を掘り下げるのが好きな私のスタイルには、小説という形式が適しているじゃないか、ということに思い至りました。

(とはいえ、モンスターペイシエントを襲う敦子の動機付け、カマをかけたらコネクタのことで敦子が都合よくボロを出してバレル、などの点には、もう少し練り上げる必要があったかも、とは思いますが。)

ただ、視覚的表現を、いかに文章で伝えるか、または、内面的要素を、いかに映像で表現するか、ということ課題として、それぞれの手段での創作に取り組んでいる方もいらっしゃるのですが。

私には、自分の作品を作るところに、「創作上の挑戦」を絡める、というほどの力量はちよつとないもので……。

ともかく、私は、自分のスタイルで創作を続けて行きたいと思いません。

確かに、私には、「Vシネのアクセル」は作れません。

でも、今回の「A」も、一応アクセルメインです。

この物語で、私は、家族を失った敦子が、照井さんや、「仲間」の力で立ち直る姿を描いた訳です。

Vシネを「動のアクセル」とするならば、私の作品は、さしずめ「静のアクセル」と言えるのではないかと、手前味噌ながら自負して

おります。

(オリジナルのスタッフが作った作品と比べるのも、烏滸がましいことではあるでしょうが。)

この2作品は、「復讐」という1つのテーマを、2つの視点で対応させてみました。

「相模刑事」は、復讐に駆られたまま進んでしまった、照井さんの「未来」の1つの形の象徴でした。

Vシネでは、照井さんは、いわば「闇に堕ちてしまった自分の未来」を「振り切り」ました。

そして、今回の作品においては、敦子は、復讐に駆られていた「過去の照井さん」の象徴と言えるでしょう。

つまり、照井さんは、「過去の自分」を、待ち受ける闇から「振り切れせ」、「絶望」から彼女を救った、ということになります。

ただ、結局、敦子は「あのような」ことになってしまいましたか……。

あそこで、敦子がすんなりと告白していたら、収まりの良い終わり方になったでしょうが、前述の通り、先の展開との兼ね合いで、こうなってしまうました。

まさしく、あ後の敦子のセリフは、この先の展開における重要人物に触れるものでしたからね……。

(と言っても、2章の最後にはその人物は、名前だけですが登場しますけどね。)

それでも、敦子は再登場いたします。

今のところ、3章辺りを予定しておりますので、今しばらくお待ち下さいませ。

さて、この後には、2章の予告を入れておきます。

そこで、1つお願いがあるのですが、予告を見て、

「次回のドーパントが誰か、なんとなく分かつちやった・・・。」
と言う方には、しばらく「お口チャック」をよろしくお願いします。
・・・(汗)。

一応、次回、「A」の設定集を投稿してから、完結とさせていただきます
く予定です。

よろしければ、ご覧ください。

次回予告

次回、「仮面ライダーW・新たなる事件簿」は……。

クイーンの依頼、それは、

「何だと、エリザベスが行方不明!?」

翔太郎たちがエリザベスの搜索の搜索を行う中、街では、人々が「知識」を奪われる、という事件が相次いでいた。

「やめて……。。

来ないで!!」

風都を逃げ回るエリザベス。

果たして、彼女は何から逃れようとしているのか?

そして明らかになるドーパントの正体、それは……!?

次回、「Bの逃避行/もうひとつの『名コンビ』」

「落ち着いて聞いてくれたまえ。

メモリの使用者は……。。」

これで決まりだ!!

A・設定

・田上敦子

風都記念病院に勤務する看護師。

どの患者にも分け隔てなく優しく接するため、周囲からは、一目置かれていた。

実は、十数年前に起こった、彼女の母の事故（後述）をきっかけにモンスターペイシエントを憎んでおり、「エンジェル」のメモリを手にして、モンスターペイシエントを襲っていた。

（しかし、自らの仕事に誇りを持っていたためか、命を奪うことまではしなかった。）

最後は、照井の言葉と、仲間の存在に気づいたことにより、自分の罪を悔いた。

そして、メモリを手に入れたいきさつを話そうとした矢先、謎の「銀色の怪人」の放った矢を受け、手術を行い、一命はとりとめるものの、現時点では意識不明。

・エンジェルドーパント

「天使の記憶」を内包するガイアメモリ、「エンジェルメモリ」を、右腕にある生体コネクタから挿入した田上敦子に変身した姿。

ギリシャの天使像のような姿で、翼を用いて飛んだり、羽根を飛ばし、相手の呼吸や視界を奪ったりすることができる。

その他、腰に差したレイピアを武器としたり、さらには、劇中は未使用だが、かき鳴らすことで相手を混乱させるハーブも持っている。ちなみに、メモリ表面の文字は、「ハの字型に並んだ天使の翼と、その間にある天使の顔」で、Aをかたどっている。

ちなみに、このメモリは、「純正品」と同じ外見、マキシマムドライブを受けてもブレイクされない、などといった、「T2メモリ」と同様の性質を持っており、違いは、端子が赤みがかった色をしているということである。

・北斗夕子

風都記念病院の看護師長。

長年この病院に勤務しており、病院全体から信頼されている。

ご主人は、パン屋を営んでいるらしい。

田上敦子に厳しい指導をしているが、それは単なる期待からではなく、かつては自分の部下であった敦子の母の代わりに、敦子を一人前にすることが、敦子の母に対してできることだと考えていたからであった。

名前の元ネタは、言うまでもなく、「二人で一人のウル○ラマン」に変身するうちの一人からである。

・古嶋陽菜（美）

風都記念病院の受付をしている女性。彼女を見て、格好を付けようとした翔太郎は、間違ってプライベート用の名刺を出してしまった。（ちなみに、裏設定では、「帽子を愛する会」の名誉支部長は、「おやっさん」こと、鳴海荘吉である。）

・信太麻里子（しのだ）

風都記念病院に勤務する女医。

確かな技術と、気さくな人柄で、病院に来てまだ1年も経っていないにも関わらず、既に信頼を勝ち取っている。

この物語では、北斗師長を呼びに来る1シーンのみ登場。

・佐橋莉乃^{さはし}

風都記念病院に勤務する看護師。

まだキャリアが浅く、失敗することもあるが、基本的に先輩たちにも可愛がられている。翔太郎に何かを伝えようとしたが・・・？

・鷹羽みなみ^{たかば}

老人ホーム、「かざぐるまの郷」に勤務する介護福祉士で、敦子の友人。

実は、敦子の母の事故は、熱を出して、意識がもつろうとしたまま、車道に飛び出し、車に轢かれかけた子供時代の彼女を、敦子の母がかばおうとしたために起こったものであった。

真実を告白してもなお、自分のことを友達だと考えてくれた敦子と、彼女が帰って来るのを待っていると約束を交わす。

・「A」の話

さて、今回の物語のキーとなるアルファベットは、Aであった。ここで、この物語のAに関係する事物について説明をしよう。

まずは、「エンジェル(Angel)」。

これは、メモリの名前であると同時に、看護師の別名、「白衣の天使」を象徴している。

また、メモリを使用する、「田上敦子」も名前のイニシャルがA(Atsuko)である。

そして、今回の主役級ライダーは「アクセル(Acceler)」。

そして、小ネタではあるが、北斗師長のご主人が営むパン屋の店名は「Ace」。

言わずもがな、「二人で一人のウル○ラマン」の名前から取らせていただいた。

「作者、私だつて亜樹子（Akiko）だよ。
つて言うか、私も一回くらい『あっちゃん』つて呼ばれてみたいな
。。。」

亜樹子さん、お願いですから、リアクションに困ること言わないで
下さ。。。何か言った？（スリッパを二刀流で装備済み）

い、いえ、別に。。。

閑話休題。

また、Aはアルファベット1文字目でもあるため、「1からの再スタート」というニュアンスも込めてみたつもりである。

ちなみに、サブタイトルの「真っ赤に染まる」とは、「血」、と見
せかけて、実は、「白衣の天使（敦子）が赤色をしたアクセルに感
化される（染まる）」の意味だったりする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1909u/>

仮面ライダーW・新たなる事件簿 第一章「Aからの再スタート / 白衣の天使

2011年10月6日04時09分発行